

手塚治虫作品集その18―『ブラック・ジャック』

はじめに

秋田書店から刊行（第1巻〜17巻）されている此の作品は長編作品のひとつである。人の命を救うことが使命である腕の良い外科医師という職業に主人公が設定されている。

医師物という分野別仕分けで此の作品を見つめて行くとき、『陽だまりの樹』に登場した手塚良庵もその外科醫を営む醫師であった。この二人の外科醫を時空間を超えた観点で対照比較していくことで、この主人公と彼が関わるこの世の多くの人々の「人としての宿命感」がより鮮明になっていくと考えて考察を試みるのである。

発端と終結

作品という虚構のなかで、現実を見つめるとき手塚治虫は醫學の進歩の過程で心臓移植という直面する社会的・倫理的様々な問題に対応し、漫画作家でありといえど、ご自身が醫師でありこれをどう解釈していけばよいのかということを決えず理會し続けてきたに違いない。

地球は手塚が表現するように、ちぢやかなものである。ここで誕生した生き物は自然界の掟に順って生命の維持と進歩を遂げてきた。

このなかで文明という世界を構築し、海・陸と地球上隈無くに亘って進化を遂げてきたのが人類であった。この人間の叡智を醫學という分野から切り出して見ようとする訣だ。

発端は欧州のある國から、大実業家ニクラ氏の息子アクドという人物が交通事故にあったといころからだ。お茶の水博士風の醫師が診察し、「頭の骨が折れて、首が折れて、肺がつぶれて、胃がひしやげて、腸がねじれて、うんちがはみだしてました」「あと三日もてば奇跡でしょう……」と診断し、金に糸目を付けず治療を行う醫者を捜す。ここに「ひとり、絶対になおせる外科医がいましたっ。日本の医者です。手術の天才です。いままで三百人なおしています」「本名はわかりません。ブラック・ジャックとよばれているそうです」というかたちで主人公が登場する。彼は治す条件として、「別の肉体、この患者のために、肉体を犠牲にする人間がいる！」というのだ。仕立て屋のデビイという少年がその目星となる。逮捕・裁判と合法的に見える人間のつくり出した掟で裁き有罪・死刑へと導く。そして肉体提供者になるのだが、オチが待っている。身はアクドそっくりでも心はデビイなのだから…。

作品の広がり

「春一番」では千晶という娘の目の手術で、角膜移植手術を行っている。「眼球銀行」の語を知る。これを千晶が彼に訊ねると、「おまえのかかった白斑病という病気はな。目の角膜という部分が白くにごるんだよ。それで、にごった角膜を新しい角膜ととりかえる。そのための眼球銀行だ。まあ血液銀行とおなじようなもんだが、眼球銀行たつて目田をあつかっているじゃない。目玉の角膜という部分をたくわえてあるんだ」という。ここで謎解きに入るのだが、移植提供者の女性が館与理子と知る。彼女は三ヶ月前、十九歳の女子学生で、乱暴されたうえに首を絞められたというのである。ここで、

「箕面医大人体物理學教（授）」という横看板文字のあと「小松佐京」先生が登場する。

「畸形囊腫」一人の少女が形成されている。「めぐり会い」〔117頁〕で名を「ピノコ」ということを知る。「人面瘡」のなかで「モグリ医者」と表現される。

「ときには真珠のように」彼の師本間丈太郎が登場する。最後の一言は心に響く。「人間が生きものの生き死にを自由にしようなんておこがましいとは思わんかね」このことばの前線に、「…な、なあ、ど、どんな医者だって、せ、生命のふしぎさには…かなわん…。に、人間が、い、生きものの生き死にを、じ、自由に、し、しようなんておこがましいとは、お、お、思わんかね…。」がある。

「めぐり会い」船医如月恵が登場する。ここで如月の口を通して彼の若き日のことを私たちは知ることになる。「めぐみ【恵】」という医大の医局で先輩後輩であり彼の恋人である。

「六等星」「ブラック・クイーン」のなかで「モグリ医者」と表現される。桑田このみ（女外科医）から「あなたたつて、冷酷で、クールで、メスの鬼で、吸血鬼で、フランケンシュタインで、ロボットで、氷人間！ そうなのオ」〔187頁〕と云われる。「U・18は知っていた」「アリの足」本間丈太郎著『ある身障者の記録』が紹介される。これが彼自身の記録なのだ。「二つの愛」「針」「おばあちゃん」「シヤチの詩」「三者三様」道警で無免許医療と重過失致死罪それに脱税の容疑で取り調べられる。「地下壕にて」金と命。「ダーティ・ジャック」あの人間にツギしてるよ。オツチャンプラモデルみたいだ。からだも、きつとツギだらけだねーつ。と幼稚園児に云われる。じゅんちゃん（新大和鉄工の社長さんの息子）に、なんでーつ、ツギハギのプラモデルのくせにつといわれる。「友よいずこ」本間先生が再登場する。事故で大けがし、本間先生が手術する。ここで初めて彼の名がクロオであることを知る。「誘拐」聴衆からの弥次！ ヤーイツ、モグリノヤブ医者ツ。人殺シメーツ。大統領ヲドウシテ死ナセタツ。出テイケーツ。政府カラウケトツタ金ヲ返セ!!。「流れ作業」「助け合い」札幌の大安商事の経理課長蟻谷蜂助の命を救う。「ストラディバリウス」世界的バイオリニストのモロゾフ氏が登場する。日本のバイオリニスト辻久子さんのことが彼のことで語られる。〔224頁〕中国の医学者葉博士（ハリ麻酔の本）が彼の脳裏に浮かぶ。「ハッスルピノコ」ピノコの出生（十八年間姉の体内に同居）戸籍上は一歳。「病院ジャック」「座頭医師」ハリ師琵琶丸という盲目の男の治療を通して中国から伝わったハリ療法について山田野先生がテレビ解説する。「勘当息子」「ちぢむ!!」

言語特徴の解析

名言の表現

- 人間のからだをあななどと、きつとしつぺがえしをくらうぞ。〔「針」2・6頁〕
- 人間のからだをあなどちやいかん。あなどつてかかるときつとしつぺがえしをくらうぞ。〔「針」222頁〕
- 生きるか死ぬか？ バカ、そんな言葉はオイソレと使うもんじゃねえよ。〔「三者三様」273頁〕
- 地球は、生きているんだ…その地球を治す医者が必要なんだ…。さようなら。〔「友よいずこ」2150頁〕
- 自分が生きるためには大事なものはいつも身からはなさぬことですて…たとえば先生にとつては手術器具でしような…あれは先生…飛行機の中においてくるべきではなかった…。〔「ストラディバリウス」2234頁〕

駄洒落の表現

- 聞くとところによると、あの人は人間と馬の脳の入れかえもやったんだと。馬さか！デ馬までしよう。
「絵が死んでいる！」 147頁〕
○あたしはね、ミス（令嬢）じゃなくツてメスよ。メスはつまり雌！いいシヤレでしょ。「ブラッ
ク・クイーン」 187頁〕
○そんな大げさな……。〔「U・18は知っていた」 129頁〕
○重傷者のかたの名前を申し上げます。中央労災病院に収容されたかた、作業員の、福田起男さん、
大平正好さん、中曾根安弘さん、加藤清正さん。〔「三者三様」 279頁〕

「ピノコ」の会話表現

- なによのさ。もうおちまいなの。ちょっと、もい上がいがたいなかつたわのよ。〔「六等星」 158頁〕
○お星ちやま、花火のカケラみたいに見えゆわのよ……。〔「六等星」 160頁〕
○まゆれ、まぼよしみたいな人よのね。〔「六等星」 172頁〕
○れも、そのかわいいうちは、にくまえちやつたじゃないのよさ。〔「六等星」 176頁〕
○先生つて、損よのね……。いつれも、ひといぼつちで人にきやわえて。〔「六等星」 177頁〕
○ね、先生。あのずーっと、はなえて、ひといぼつちで光つてゆのが先生よのね。〔「六等星」 177頁〕
○ねー、そいれ、あの先生の横れ、くっついて ちっちゃーく光つてゆのは、ピノコなのよのね。〔「六等星」 177頁〕

- 先生いまちえん。いま旅行中よのさ。あたちおくだんなの。〔「U・18は知っていた」 124頁〕
○えやい子ねえ。ずーっとあゆいたんれちよ。〔「アリの足」 126頁〕
○ほや！こんなにとつちやたわのよ。／ろこ。〔「シヤチの詩」 248頁〕
○わーっ。きえいなお水！。泳ぎたいくやい！。〔「シヤチの詩」 249頁〕
○ちんぱいいやないわのよ。じゃーいつてやつちやい。おくだんがおくゆぐやいいいじやなのよさ。
〔「誘拐」 254頁〕
○ピノコ、ひとりちななのよ。もつとていねいにあじゆかってくえたつていいれちよ。なわぐやいほろ
いてよ!!。レイをばかにちゆとこうよ。〔「誘拐」 260頁〕
○ピノコよせないわよ。れつたいにこよせないわのさ。先生がピノコ助けてくえゆんだかや。〔「誘
拐」 261頁〕
○先生、きつと、シウツちないわのよ。らいとうようよいピノコがらいじにきまつてゆ。〔「誘拐」
261頁〕
○らいとうようなんてかんけいがないひとれちよ。ピノコはなんしよおくだんなんらかやね！〔「誘拐」
262頁〕

他の人物による幼児語表現

- どうちてきよう。パパはおこつてんの？〔「流れ作業」 218頁〕

「医局」の隠語表現

- 看護婦だってほとんど問題にしてないみたい。〔「六等星」 163頁〕

- きみは**手術**が実にしたのしそうにみえるな。ワツハハハ。「ブラック・クイーン」 1 182頁
- 患者**ひとりひとりを全部ブレインがみてるんですか。「U・18は知っていた」 1 201頁
- ほかの**患者**はきみたちにまかせる。わしは娘の命を救わにやならんのだつ。「流れ作業」 2 185頁